

## 埼玉県腸管出血性大腸菌検出状況(2024年)

埼玉県で2024年に分離され、衛生研究所で確認した腸管出血性大腸菌は155株でした。分離された155株のO血清型・毒素型別を表1~2に示しました。最も多く検出されたO血清型はO157で80株(51.6%)でした。そしてO26が12株(7.7%)、O103が9株(5.8%)、O115が5株(3.2%)と続きました。毒素型については、O157はVT1&2産生株が50株、VT2単独産生株が30株、O26はVT1単独産生株が12株でした。

分離された155株の内訳は、有症者由来が91株(58.7%)、無症状病原体保有者由来が64株(41.3%)でした。血清型別の有症率をみると、最も多く検出されたO157では76.3%(61株/80株)、O26では91.7%(11株/12株)、O103は55.6%(5株/9株)で、これらの血清型では有症者が5割以上を占めていました。一方で、OUT(Untypable)として届出のあったものでは有症率が25.8%(8株/31株)と、無症状病原体保有者が7割以上を占めていました。

表1 腸管出血性大腸菌のO血清型別検出数(2024年)

O血清型	有症	無症状	合計
O157	61	19	80
O26	11	1	12
O103	5	4	9
O115	1	4	5
O91	1	3	4
O128	1	3	4
O55	1	2	3
O111	2	0	2
O8	0	2	2
O25	0	1	1
O121	0	1	1
O145	0	1	1
OUT	8	23	31
合計	91	64	155

表2 O157株及びO26株の毒素型別検出数(2024年)

O血清型	毒素型	有症	無症状	合計
O157	VT1	0	0	0
	VT2	21	9	30
	VT1&2	40	10	50
合計		61	19	80

  

O血清型	毒素型	有症	無症状	合計
O26	VT1	11	1	12
	VT2	0	0	0
	VT1&2	0	0	0
合計		11	1	12

直近5年間のOUT株の検出数を表3に示しました。総検出数に対する割合は、2020年5.7%(5株/87株)、2021年14.4%(16株/111株)、2022年15.1%(18株/119株)、2023年6.8%(10株/148株)、2024年20.0%(31株/155株)となっており、2024年は過去4年と比較して多く検出されました。なお、有症率については、いずれの年も4割以下でした。

表3 OUT株の検出状況(年別)

年	有症	無症状	合計
2020年	2	3	5(87)
2021年	3	13	16(111)
2022年	3	15	18(119)
2023年	3	7	10(148)
2024年	8	23	31(155)

※()内は腸管出血性大腸菌の県内年間検出数

これら 155 株の薬剤感受性試験を行ったところ、セフォキシチン及びセフポドキシム耐性株が 2 株、シプロフロキサシン及びノルフロキサシン耐性株が 1 株確認されました。なお、ホスホマイシン耐性を有する株は確認されませんでした。その他の薬剤耐性は耐性率が高いものから順に、ストレプトマイシン 41 株 (26.5%)、テトラサイクリン 31 株 (20.0%)、クロラムフェニコール 21 株 (13.5%)、アンピシリン 15 株 (9.7%)、ST 合剤 9 株 (5.8%)、カナマイシン 8 株 (5.2%)、ナリジクス酸 4 株 (2.6%) が確認されました。

そのほか、喫食歴と腸管出血性大腸菌の関連につきましては、2024 年は少なくとも 9 株は、韓国でユッケや生レバーの喫食歴のある方から検出されました。ユッケや生レバーなど、加熱不十分な食肉及び内臓は、国内・国外問わずハイリスクな食品であることに変わりありません。十分な加熱を行って喫食することを改めて注意喚起していかなくてはなりません。

腸管出血性大腸菌感染症が多発する夏季を迎えました。的確な情報提供を通じて、感染拡大防止への一助となるよう努めて参ります。